

『中の根本の言葉を章とした知慧（根本中論）』

(第一章)

その方が、
 滅無く、生無く、
 断無く、常無く、
 来無く、去無く、
 別義ではなく、一義ではない、
 戲論がまさしく熄滅し、寂静である縁起生を示された。
 完全なる仏陀であり、諸々の説者の（中でも）聖なる方である、
 その方へ礼拝奉る。（帰敬偈）

自らよりではない。他よりではない。
 双方よりではない。無因ではない。
 何らかの事物が、何処においても、
 生じるとは、何時にも有るのではない。 1

縁は四相あり、因縁と、
 所縁と等無間
 増上もその如くであり、
 第五の縁は有ではない。 2

諸事物の本性とは、
 縁等に有るのではない。
 我の事物が有るのでなければ、
 他の事物は有るのではない。 3

縁を具える行為は無い。
 縁を具えぬ行為は無い。
 行為を具えぬものは縁ではない。
 行為を具える、あるいは。 4

行為は縁を具えるのではない。
 縁を具えぬ行為は無い。
 行為を具えぬものは縁ではない。
 行為を具えるか、あるいは。(仏)

これらに依拠して生じるので、
 それ故にこれらは縁であると言う。
 生じていない限り、
 これらは縁ではない。如何そうではないのか。 5

無あるいは有の意味においても、
縁とは適したものではなく、
無ければ何の縁となろうか。
有るならば縁が何をしようか。 6

法（現象）は有と、
無と有無が成立しない時、
如何様に成させるものを因といおうか。
そのようであれば正理ではない。 7

この有る法は所縁が、
無いのみであると近しく示された。
如何に、その法は対象とすることが無ければ、
所縁が有ると何処でなろうか。 8

諸法が生じたのでなければ、
滅は合理にはならない。
それ故に等無間は正理ではない。
滅したならば、縁も何ものであろうか。 9

本性が無い諸事物の
有は有るのではない故に、
これが有るのでこれが起こる、
というこれは合理ではない。 10

諸縁のそれぞれと集合に、
その果はまさしく無い。
諸縁に無いもの、
それが縁より如何様に生じようか。 11

仮に、それ（結果）は無いとしても、
それらの縁より生じるとなれば、
縁ではないものよりも、
何故生じるとならぬのか。 12

果が縁の本性であるならば、
諸縁は自らの本性ではない。
自らの事物でないものより、如何なる果があろうか。
それが、如何様に縁の本性となろうか。 13

無あるいは有の意味においても、
縁とは適したものではない。
無ければ何の縁となろうか。
有るならば縁が何をしようか。（仏）

ある時、法（現象）は有と、
無と有無が成立しないので、
如何様に成させるものを因といおうか。
そのようであれば正理ではない。（仏）

（そう）である法は所縁が、
無いのみであると近しく示された。
そのように、その法は対象とすることが無ければ、
所縁が有ると何処でなろうか。（仏）

仮に、それは無いとしても、
それらの縁より生じるならば、
縁ではないものよりも、果は
何故かといえば、生じない。（仏）

果は縁より起こったのである。
諸縁は自らより起こったのではない。
自生起ではないものより、如何なる果が
あろうか。それは、如何様に縁より起こっ
たのか。（仏）

それ故に縁の本性ではない。
縁ではない本性の果は、
有るのではない。果が無いのであれば、
縁ではない、縁であると、何処でだろうか。

それ故に縁の本性ではない。
縁でないものより起こった果は、
有るのではない。果が無いのであれば、
縁ではない、縁であると、何処でだろうか。
(仏)

「縁を考察する」という第一章である。

※ (仏) は、『根本中論』チョコロ訳 (『ブッダパーリタ』に引用された旧訳) で、パツァブ訳 (新訳) と異なる記述を示す。

DECHEN 訳